

別紙2

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

都道府県名	岩手県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	千厩町立千厩中学校					
学 年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	4	4	1	13	27
生徒数	121	140	126	5	392	

研究の概要

1. 研究主題

<p>自ら学ぶ生徒の育成 ～基礎・基本の定着を図る指導法の工夫を通して～</p>
--

2. 研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

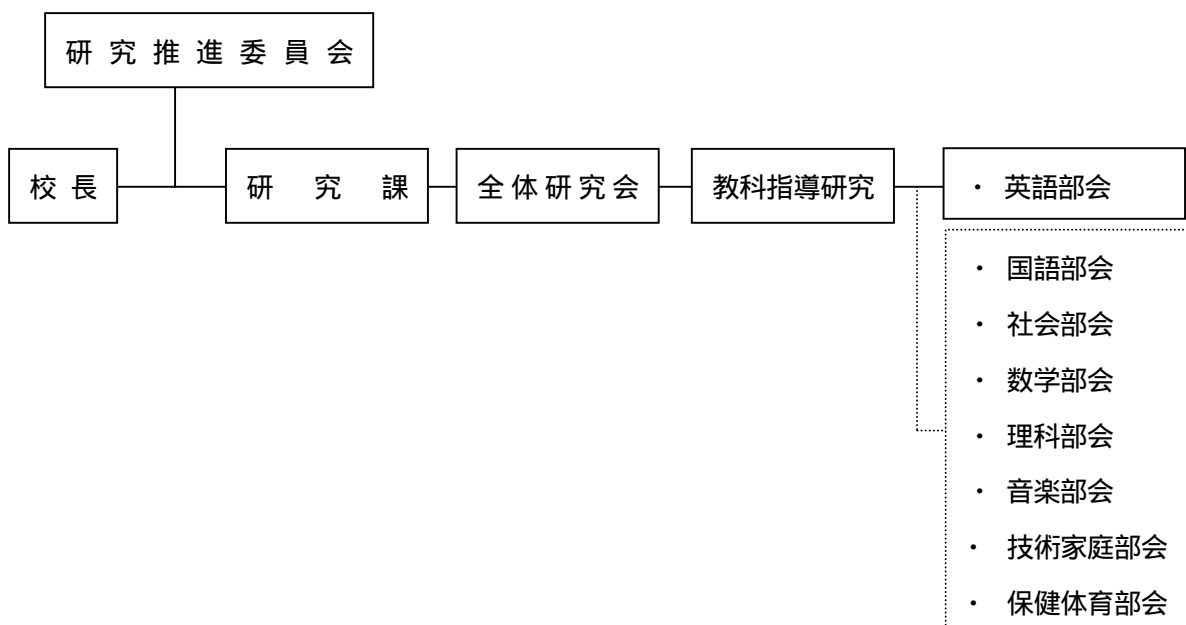
<ul style="list-style-type: none"> ・ 全学年・英語 <p>諸検査の結果から、確かな学力が十分に身に付いていないと判断されるため。</p>

(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>テーマ 英語の音読を中心に据えた指導方法・指導体制の工夫</p> <p>研究の見通し</p> <p>「音読」を英語学習の技能の最も基礎的・基本的な学習活動ととらえ、授業において「音読」を中心に据えて、少人数指導やチームティーチングの方法等を用いながら、生徒の成就感や学習意欲を大切にしたい指導を展開すれば、生徒の学力は向上するであろう。</p>
	<p>研究の内容・方法</p>
	<p>(1) 授業における音読指導の工夫</p>
	<p>(2) 授業における音読の評価の工夫</p>
	<p>(3) 音読指導・音読評価の位置付け方の工夫</p>
	<p>(4) 生徒の学習意欲を高める授業の工夫</p>
<p>(5) 指導と評価の一体化を目指した指導計画作成と指導実践の工夫</p>	
<p>(6) 授業と連動した家庭学習の方法指導の工夫</p>	

平成16年度	<p>テーマ</p> <p>指導内容の「焦点化」と指導過程の「細分化」による効果的な指導方法の工夫</p> <p>研究の見通し</p> <p>年間指導計画に工夫改善を加えることにより、各授業時間毎の指導内容の焦点化を図りさらに各授業時間ごとの到達目標に至るまでの指導過程を細分化し、ステップ毎の達成状況を把握しながら指導を行えば、生徒の学力は向上するであろう。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>(1) 年間指導計画の見直しと工夫改善</p> <p>(2) 授業時間毎の指導内容の整理と精選</p> <p>(3) 指導過程の細分化の工夫</p> <p>(4) 細分化されたステップ毎の評価とフィードバックの方法の工夫</p> <p>(5) 授業と連動した家庭学習方法指導の工夫</p>
--------	--

(3) 研究推進体制



1. 研究の成果

取組内容と実践

(1) 授業における音読指導の在り方の工夫

学力向上のための方策として最も重視したのが「音読」である。音読の指導に際して、少人数指導による習熟度別のグループを編成し、それぞれの生徒の実態に可能な限り配慮しながら指導を行った。

(2) 授業における音読の評価の工夫

生徒の学習定着状況や反応などから、3人の教師(T1・T2・ALT)による形成的評価を行った。努力を必要と判断される生徒には、適宜フィードバックしながら授業を展開した。

(3) 生徒の学習意欲を高める授業の工夫

ALTによるオーラルプレゼンテーション(口頭での導入)、発音練習、音読のモデルリーディング(範読)を行った。そして、音読した生徒へアドバイスや励ましを行い、より英語らしい発音を目指そうという意欲がもてるように工夫した。

(4) 指導と評価の一体化を目指した指導計画作成と指導実践の工夫

年間指導計画の中に1時間毎の評価規準を明確に示し、指導内容全体を見渡しながら、計画的な評価が可能になるようにした。また、評価の判断基準となる内容についても明らかにするとともに、評価を行う場面・評価の方法などにも工夫改善を加えながら、指導と評価が一体となる授業を行った。

判断基準に基づき、学習過程のある時点で評価を行い、目標が達成できていない部分について努力させ、再度評価を行った。

さらに、自己評価カードを準備し、生徒一人一人に授業時間の自己の取組を振り返らせることで、授業に臨む生徒の意識を高める指導を行った。

取組の成果

(1) 少人数による習熟度別のグループ学習を取り入れたことにより、生徒個々に成就感や達成感を味わわせ学習意欲を高めることができた。

(2) 少人数指導により、一人一人に目が行き届き、形成的評価を基に次の授業に生かすことができた。

(3) 英語の授業を3人の教師「T1・T2・ALT(英語指導助手)」で行うことにより、複数の目で客観的に評価しながら指導を進めていくことができた。

(4) 自己評価カードの活用により、生徒の学習状況を把握しながら指導を進めていくことができた。

(5) 単元の指導計画と評価規準をを作成したことにより、評価を指導に役立てることができた。

(6) 少人数指導により、「勉強内容がわかるようになった」という生徒からの声が多くなった。

(第1学年86%、第3学年4%) アンケート調査：学年1学級抽出、第2学年は実施せず。

2. 今後の課題

- (1) 努力を必要と判断される生徒に対する補充指導のための時間確保が十分にできない。
- (2) 指導過程における評価についてさらに工夫を重ねていく必要がある。
- (3) 生徒一人一人に対し、達成状況を知らせるための手立てが必要である。
- (4) より客観的な評価を行うため、教師の評価に係る力量を高めることが必要である。
- (5) 英語科における音読指導の継続と、次のステップのための指導を工夫していく必要がある。
- (6) 全教科において基礎・基本を定着させるための取組を行っていかねばならない。
- (7) 数値では見えない思考力・判断力などの向上を把握するための判断基準のあり方と実践での評価を工夫していく必要がある。

学力等把握のための学校としての取組

- (1) A A I (学習適応性検査)により、学力向上要因を分析する。
- (2) N R T (標準学力検査)により、同一学年の年度毎の違いを検証する。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- (1) 学級・学年・地区懇談会などで、研究内容を紹介。
- (2) ホームページ上での研究内容の紹介を検討中。
- (3) 各教育研究団体等への紹介。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】	15年度からの新規校	14年度からの継続校		
【学校規模】	3学級以下	4～6学級		
	7～9学級	10～12学級		
	13～15学級	16学級以上		
【指導体制】	少人数指導 その他	T・Tによる指導		
【研究教科】	国語	社会	数学	理科
	外国語	音楽	美術	技術・家庭
	保健体育	その他		
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】		有	無	